





## 物語文②「心情の読み取り」

森絵都『アーモンド入りチョコレートのワルツ』より『子供は眠る』

### 大隅先生の国語講座 第二回

#### 今回のねらい

大隅講座第2回では、物語文の読解の基本となる「心情の読み取り」を2回にわたって強化していきます。今回扱う問題では、主人公の気持ちが目に見える形でどんどん変化していくので、その変化を捉えながらしっかりと読んでいきましょう。

【ぼく（恭）達は、章（あきら）、智明（ともあき）、ナス、じやがまるの4人で、章の別荘で毎年合宿を行っている。章の日課として、夜にクラシックを聴く時間が設けられ、全員これに参加しなければならぬ。以下は、ぼくと智明がクラシックの時間について話し合うところから始まる。】

「でもさ。章くん、中学生のくせにクラシックが好きなんて、なんかへんだと思わない？」

別荘にきて四日目の朝。かんかん照りの太陽の下で、智明と洗濯物を干しているうちに、ふとそんな言葉がぼくの口をついてでた。

あとから考えてみると、これは非常に危険な発言だった。そして実際、この一言が今年の夏を、去年までとはまったくべつものに変えてしまったんだ。

きっかけは、朝食の時間のちよつとした出来事。

ハムエッグにソースをかけようとしたぼくに、章くんが「ぼか。ソースなんてかけるな。しょうゆで食べよ」と小言を言った。

その瞬間だ。ぼくは初めて章くんに対して、素朴な疑問を感じてしまった。

どうしてぼくはいつも章くんの言うとおりにしなきゃいけないんだろう？

ふしぎなことに、それまではそんなこと、一度だって考えたことはなかったんだ。章くんは中三で、ぼくらの一番年長で、そもそもこの別荘の主人（の息子）で、だから言うことをきくのはあたりまえだと思っていた。五年前からぼくらはずっとそうしてきたんだし。ときどき面倒くさくなることはあっても、もやもやといやな気分になったのは、本当にそのときが初めてだった。

ぼくは結局、ハムエッグにしょうゆをかけて食べたけど、ソースのほろがうまいのに……という苦い後味はいつまでも残った。

だから智明とふたりきりになったとき、とっさにそんなことを口走ったんだと思う。

「ふつうはさ、ロックとか、ポップスとか、聴くじゃん。せめてフォーくだよ。クラシックなんて、ちよつと聴かないぜ」

「まあ、ねえ」

智明は慎重だった。たぶん用心していたんだろう。

「でもさ、だれにだってちよつとずつ、へんなところはあるんじゃない」

その証拠を示すように、智明は洗いたてのタオルをつぎつぎとロープに引っかけていく。庭一面にジグザクと張られた W 状のロープ。その半分の V は智明のタオル専用だった。

たしかに、顔を洗うたび、風呂に入るたび、歯をみがくたびに、いちいちタオルを変えていく智明だって、相当へんだ。

「まあ、そりゃあ、ぼくだって、へんなところはあるけど」

ぼくが口ごもると、智明は大きくうなずいて、

「うん。正直言っておれ、おまえの味覚ってよくわかんない」

「え、そうか？」

「オムレツにソースぐらいならまだわかるけどさ、天ぷらにソースはないと思うよ。漬物にソースってのも、おどろいた」

「やっぱり、へんかなあ」

「へんだよ。思いきり」

言われてみれば、そのとおりだった。

ぼくにも、智明にも、だれにでもへんなところはあるだろう。

ナスは顔の形がへんだし、じゃがまるは頭の形がへんだ。

でも……。

「でもぼく、智明やナスの漬物にまでソースをかけたりはしないよ。章くんみたいに、自分の趣味を押しつけたりは、しない」

ぼくはいつになく強い調子で言った。

そのとたん、こんがり焼けた智明の顔の中で、ふたつの瞳が怪しい光を放ったのだった。

「いいか、恭」

智明はぼくの手首をむんずとつかむと、スパイみたいに声をひそめて、

「この話は、あとでじっくり、だ。今言ったようなこと、ほかのみんなの前で、絶対に言っちゃだめだぞ」

「なんで？」

「その理由も、あとでじっくり、だ」

低くつぶやくなり、智明はまた何事もなかったようにタオルを干しはじめた。

赤。青。黄色。山吹色に緑色。色とりどりのタオルが潮風に乗ってはためいている。「きれいだなあ」と、ぼくがつぶやいて、智明に笑われた。これが、この夏最後の平和な瞬間だったのかもしれない。

その日のぼくは何をするのもうわの空だった。勉強中は「集中力が無い」と、章くんが怒られるし、昼食中はまたうっかり冷やし中華にソースをかけて「成長がない」とにらまれるし、ろくなことはない。

ようやく智明とまたふたりきりになれたのは、夕食のあとの自由時間。

ちよつと散歩してくる、と章くんが断って、ぼくらは海辺へくりだした。

星空のまばゆい夜だった。濃紺の闇の中、ちくちくと瞳を刺すような光が、水平線の奥のほうまでもずっと続いている。ぼくらはその下をぶらぶらと歩いて、別荘からだいぶ遠ざかったころ、平らな岩場に並んで腰かけた。足下の暗がりは何十匹もの船虫がいつせいに飛びのいていった。

「五年前、最初にここに来たときのこと、おぼえてる？」

船虫の影を目で追いながら、智明がぼそつと切りだした。

「五年前？」

「うん。なんかもう大昔みたいだよな」

「だよなあ」

当時の記憶はあいまいだった。だって、ぼくはまだ小学三年生だったから。じゃがまるは小さすぎて連れてきてもらえなかった。そんな時代だ。

「あのときさ、正樹くんって子も来てたじゃない」

「ああ、うん……」

「ほらあの、章くんとしょっちゅうけんかしてた子」

「うん、うん」

思いだした。

正樹くんは章くんの父さん方の親戚。ぼくらとはその夏が初対面だった。気ままというかわがままというか、とにかくマイペースな男の子

で、みんなが勉強していてもひとりで遊んでたし、もちろんクラシック鑑賞なんてつきあわずに、さっさと部屋へ引きあげていった。ぼくはうらやましかつたけど、章くんはいつもかりかりしていたっけ。

「正樹くんがここに来たの、あの夏が最初で最後だったよね」  
智明の声が重く響いた。

「つぎの年からは、もういなかった」

「うん」

「なんでだと思う？」

ぼくには返事ができなかった。

「四年前はさ、貴ちゃんも一回、来たじゃない」

「ああ、貴ちゃんね」

貴ちゃんのこととはよくおぼえている。スーパーマンみたいな小学生だったから。

「すごい子だったよね。勉強できるし、スポーツも得意だし、掃除なんかもささっとやっちゃってさ。小野寺さんにも、料理の筋がいい、なんて言われちゃって。何やっただってみんなの一番で、体も章くんよりでかいから、ぼくらと同じ年なのに、なんか一番年上みたいでさ……」

そこまでべらべらしゃべってから、ぼくははたと口をつぐんだ。その貴ちゃんもつぎの夏には、ぼくらの前から消えていたんだ。「また会おうね」って約束して、にこにこ手をふって帰っていったのに。

「つまり、そういうことだ」

智明が言った。

「章くんに逆らったり、章くんよりデキるところを見せたりしたら、もうここには呼ばれなくなる」

脳天にがつんと来た。

ぼくは一瞬、どうすればいいのかわからなくなって、とっさに海へ目をやった。暗い暗い夜の海。遠い岸辺に灯台の光が見える。その光がぐるりとひとまわりしても、ぼくにはまだどうすればいいのかわからなかった。

「じゃあぼく、どうすればいいのかな」

情けないけど、ぼくは智明に訊いてみた。

「今までどおりにしてればいいんだよ。章くんの言うことをきいて、章くんより目立たないようにして」

「章くんの言うことがいやになっても？」

「いやな顔なんて見せるなよ。隠すんだ。隠しとおすんだ」  
「できるかな」

「おれは去年からそうしてたよ」

ぼくはおどろいて智明にむきなおった。

智明は**苦しい笑顔**をこしらえて、

「だっておれ、今年もここに来たかったから。おまえや、ナスや、じゃがまるるとき、また一緒に遊びたいじゃん。そうでなきゃなんか、夏って感じ、しないもんなあ」

たしかにそうだった。

この別荘で過ごす二週間の夏。それはぼくらにとって本当に貴重なものなんだ。みんなが勢揃いして遊べるのなんて、この機会を逃すと、ほかにない。やかましい家族から離れて、ぼくらだけの世界にひたれるこの大事な夏を、ぼくは絶対になくしたくなかった。

「帰ろ。そろそろシューマンの時間だよ」

智明が元気なく言って、立ちあがった。そのまま両手を腰に当て、ぐぐつと体をそらしながら、

「おれね、今年ここに来てみたらさ、章くんより背が伸びてたんだ。ほんの少しだけど。でもなんとなくそのこと、章くんにバレちゃまずい気がして、いつも猫背なの」

「そうか」

そんな苦労までしてたのか。

「じゃ、ぼくらの部屋にいるときは、ぴんと伸ばしてなよ」

ぼくも元気なく言って、立ちあがった。

お互いをいたわりあう老夫婦みたいに、ぼくらは来た道をとぼとぼと引きかえしていった。

## 設問

問1 『素朴な疑問を感じてしまった。』とありますが、どのような疑問だったのか。それがわかる一文を本文から探し、初めの五字と終わりの五字を書き抜きなさい。

問2 『でも……。』とありますが、これに続く文章として、考えられるものを以下の1.~4.の中から選びなさい。

1. ぼくは章くんにはへんなどころなんてないと思う。
2. 皆へんなどころを持つているけど、それを責めたりはしない。
3. へんなどころを指摘するのは、当たり前のことだよ。
4. ぼくはどこかに完璧な人がいると思うんだ。

問3 『絶対に言っちゃだめだぞ』とありますが、どのようなことを言っているわけではないのですか。文章中の言葉を使い、㊦文字以内で答えなさい。

問4 『その日のぼくは何をするのもうわの空だった。』とありますが、この時の『ぼく』の気持ちとして、正しいものを以下の1.~4.から選びなさい。

1. 智明と夜更けまで話していたので、早く寝たいという気持ち。
2. せっかく別荘に来ているのに、全然遊べていないことを不満に思う気持ち。
3. なぜ、章の陰口などを口にしてはいけないのか、理由がわからず気になっている気持ち。
4. 智明と章の関係が悪くなったのではないかと心配する気持ち。

問6 『苦しい笑顔』とありますが、この時の智明の気持ちとして最も適切な答えを以下の1.~4.から選びなさい。

1. 章の陰口を言うのは、危険な行為なので、緊張している気持ち。
2. 章には疑問を持つこともあるが、夏に皆と集まりたいから我慢している気持ち。
3. 章に逆らうことができないのが、悔しくて怒りに震えている気持ち。
4. 去年から章の態度を気にして、いろいろ我慢していたことを気づいてもらえなくて、悲しい気持ち。

解答

問 1 .. どうしてぼくんだらう？

問 2 .. 2

問 3 .. 章に対する疑問や章の変なところについて、話し合うこと。

問 4 .. 3

問 5 .. 2

ファイル名 : Eden 講座2 授業資料.docx  
フォルダー : /Users/yukiishibashi/Downloads  
テンプレート : /Users/yukiishibashi/Library/Group Containers/UBF8T  
346G9.Office/User Content.localized/Templates.localized/Normal.dotm  
表題 :  
副題 :  
作成者 : Yuki Ishibashi  
キーワード :  
説明 :  
作成日時 : 2021/10/15 13:42:00  
変更回数 : 1  
最終保存日時 :  
最終保存者 :  
編集時間 : 10 分  
最終印刷日時 : 2021/10/15 14:25:00  
最終印刷時のカウント  
ページ数 : 9  
単語数 : 4,320  
文字数 : 394 (約)